

## 菊池フジノ先生に伺う

——大塚移転当時の附属幼稚園——



《聞き手》

中島 国太郎

私が在園した昭和八、九年当時（主事倉橋惣三先生、担任及川ふみ先生）の附属幼稚園の記憶を確かめたいと思い、昨年三月、菊池フジノ先生にお便りをした。先生は、五十年近くも前の私のことを覚えていて下さり、先生のお宅近くの西荻窪の喫茶店で、約二時間にわたって、私のさまざまな質問に答えて下さった。以下は、その折の抜粋である。

\*

中島 先日、附属幼稚園の堀合先生に伺いましたら、お茶の水から大塚に移った当時の、昭和八、九年ごろの記録が、ほとんど残っていないということ。

菊池 そうですか。そのころは、まだお庭が整っていませんでした。まだお倉橋先生が、「大きな山を作りたい」とっておっしゃってね。土を盛った山があったん

ですよ。そこへみんなお子さんたちが登って、どろんこになって遊んでいたんですけど、その後ああいう建物だったら庭園らしいものが必要だっていうんで、日比谷公園の庭園の課長さんが倉橋先生と御懇意な方で、その方が設計してああいう庭になす

ったんでございますよ。

中島 私の記憶ですと、お庭にブランコはあったような気がするんですけど。

菊池 そうです。「池の組」の真向かいぐらいい。

中島 それから、ジャングルジムもあつた。

菊池 はいはい。ありました。ブランコの隣りに。

中島 あのころは、ジャングルジムなんて珍しいところで。

菊池 そうです。

中島 すべり台でも面白く遊んだように思うんですけど。

菊池 すべり台もそのころからありました。

中島 それから、藤棚も。

菊池 ありました。これはね、お茶の水から持っていった藤棚なんです。昔、震災前は小学校との境、あの辺ずっと藤棚で、その藤を震災直後のバラックの幼稚園でも植えてたんです。その藤を持っていきまして。

中島 今の園舎には蔦がはっていますね。

菊池 そうですね。今は一杯に。でも、そのころはまだちよろちよろという程度で。

中島 それから、スタンドグラスが素晴らしかった。

菊池 あの園舎が建つと、すぐからあつたんです。それには、こんな話がありました。あの園舎はみんなで六万の予算だったそうです。それでも余って使い途がなく

て、スタンドグラスを作ったんだそうですよ。そして、その色のわりめのところは、鉛でついであるんで、修理が大変だから割らないようにと倉橋先生から言われて、スタンドグラスには気をつけて開けたてをしたものです。

中島 そうすると、あのスタンドグラスを考えられたのは、やはり倉橋先生だったんですか。

菊池 倉橋先生……ですね。その前の堀先生もね、外国を見ていらして、御自分が設計なさった、とおっしゃるんですけど。

中島 そういう先生方のお陰で、私たちが今幼稚園へ伺つても、懐しい「林の組」「池の組」をそれぞれ表す、「林」や「池」を描いたスタンドグラスが見られるわけですね。……ところで、当時は何時始まりでしたか。

菊池 九時ですね。でも私どもは、だいたい八時半には来ておりました。

中島 登園した時に、先生方はもう教室に入っていっちゃった。

菊池 そうですね。倉橋先生の主義は、早く来て、お部屋もきれいにしして、空気も入れ換えて子供を待ち受ける、というのがいい先生だ、っていうことになっておりましたからね。

中島 特別、時程というのは決まっていなかったようにも思うんですが。

菊池 私なんかですと、お子さんを自由に遊ばせておきますけれど、ちょっとその遊びに飽きたっていう様子が見えるんですね。そういう時に、みんなと一緒に仕事をするとか、お話を聞くとか、お子さんと一緒に計画するということをやっております。お茶の水は、「自由保育」だと言わうんですけど、私どもは「自由」ということとはないんです。「混合」という形ですね。例えば製作にしても、先生のをあてがうんじやなくて、みんなが考えてやるっていう

ような方向に持っていきましたからね。

中島 あのころの製作っていうと、きびがら細工なんかも。

菊池 今はもうありませんけどね。

中島 ねん土は、すぐに乾いてしまったりして、難しかったように思うんですけれど、難しかったように思うんですけれど。

菊池 そうですね。このごろは油ねん土ですけれど、あのころは本当のねん土で、かめにはぬれ、ぶぎんを掛けておかないと、乾いてしまっして使えないんです。そういうことには、絶えず気をつけていたわけですよ。

中島 今で言えは「切り紙」みたいなものもしました。糊ではりつけるんですけど、その糊が手あかで黒くなったり、手に色がついたりして、なかなかうまくいきませんでした。

菊池 そういうことがありますね。「ぬり絵」とか「切り紙」とか、絵をかくこと、お話をきくこと、お遊戯をするこ

と、そういったことをいろいろ組み合わせる保育案を立てたんですよ。

中島 私たちには、やらされた、なんていう記憶はないんです。

菊池 みんな、そう言いますね。「われわれはいい時代に幼児だった」。なんて言ってますから、当時の人は、やらされたっていう気がなく、楽しくやるようにして、子供が進んで興味をもってやるように仕向けたわけなんですね。

中島 そういう時、いちばん苦勞なざったのは教材の準備ですか。

菊池 まあね、苦勞したっていう記憶はないです。子供が楽しむもの、興味あるものをね、子供の生活を見ながら考えて、それを子供と相談しながら案を立ててそろえるわけですね。でも、教材なんてだいたい廃品を利用したものです。今の人は新しいものや、セットになっている既成品を使いたがるようですけれど、「鯉のぼり」なんて

いうのは、包装紙の大きいのを使ったりして……。

中島 幼稚園では、いったんお庭へ出ますね。そうしてまたお教室に戻ってくる、何かしたくなるような気がしたと思うんです。何でそういう雰囲気になったんでしょうか。

菊池 そうですね。そういうふうな心がけておりましたからねえ。絵本なんかもちよっと開いておいたり……。

中島 いくつかの記憶のうちの一つに、羽子板を作ったような……。

菊池 ああ、そうですね。それはね、暮れにはお正月のおみやげを持って帰れるように、たいていは致しましたね。お子さんが自分の好きな絵をかいて、そのあと「焼き絵」といって電気でさすると焼けるんですね。そして色を塗って、本当の羽子板のようになるんです。味があって。そんなことは必ず致しました。

中島 そういうことが経験できたのは、及川先生が、今で言う絵画製作の方面に御堪能だったからでしょうか。「ぬり絵」にも「及川ふみ多がく」というのがたくさんあって。

菊池 そうなんです。及川先生がおかきになったのを印刷して、昭和九年ごろは「ぬり絵」をよくやってました。戦後アメリカの指導者が来まして、創造性の芽をつんでしまうから、「ぬり絵」はいけないっていうことになってやめましたけどね。でも、子供って好きなんです。

中島 みんな、「ぬり絵」は大好きでした。菊池 考えてみると、「ぬり絵」をしたからって、そんなに創造性が失われるものじゃないと思うんです。まあ、しょっちゅう「ぬり絵」をしているんじゃないか、そうかもしれませんが、自由な表現の分野がたくさんございますからね。私、失われたいと

思いますよ。それこそ、あの当時のお子さんと最近のお子さんを比べても、ちつとも違ひませんものね。昔のお子さんにも創造性がありました。以前は一週間に一度か二度はね、及川先生のおかきになったもので、「ぬり絵帳」っていうものがありました、それをよくやったものです。

中島 それから、「マサカリカツイデ」などのお遊戯なんかもよくやって……。

菊池 あのころ、お遊戯は遠慮会釈もなくやっていたんですけど、戦後やっぱり創造性育成のためには、ああいう既成の遊戯は喜ばれなくなりました。でも、私は、ああいうものもあっていいと思います。みんなが同じ踊りを踊るっていうのは、楽しみですものね。どこでもやりますもの。田舎でも、開発途上国なんかでも。やっぱり人間の喜びの表現ではないでしょうか。ああいうものを「いけない」っていうのは、指導の方法に問題があるのでしょうか。「こ

うしなさい。ああしなさい。」というんでなくて、金太郎さんの様子を考えさせたりしてね、そういうふうな指導をすればいいと思うんです。そして、お子さんというのは他人の真似をする習慣がありますから、

例えば、誰かが考えた踊りをする時でも、「先生、こんなこと考えたんだけど、やってみるからね、悪いところあったら言って」って言うと、「いいよ。」なんてお子さんが言ってくれますね。そして、自然にそれを真似しますからね。いいと思うものを真似します。そういうことで、指導の方法を考えれば、既成の遊戯もあっていいと思います。

中島 さっき申しましたように、お教室に入るとそこで自然に何かしたくなる、折り紙を折るなり絵をかくなり……。

菊池 積み木をすとかね。

中島 あれが、倉橋先生の選集などに出ている「誘導保育」っていうんですか。

菊池 いえ、「誘導保育」っていうのは、まあ、先生の計画の一つなんですけどね。子供の生活をじっと見ているとね、子供たちが積極的に生活的な興味を持つような主題が、遊びの中にあることを発見します。

そういう、何かしら子供の生活にまともを与えようというテーマを教師が用意して、幼児を誘導していくんです。私ほね、例えば「人形の家」っていうテーマで、したんでございますよ。その時、この人形が、何か買物をしたくなるはずだ、買いにいく町を作りましょう、町へ行く時に渡る橋を作りましょう、などと発展させましてね。川や橋や、釣りでもしているようなところを作って……。こんなふうに、一つの主題のもとに、幼児の生活を発展させていくんです。一週間とか、長い時には一箇月とか、子供の注意や興味が続いて、作ることや、遊びが一つのテーマのもとに、いろ

いろと展開されていくんでございます。

「おもちゃやさん」なんていうテーマでもやってみました。

中島 めいめいおもちゃを作って、買ってくる友達に売るようなかっこうの……。

菊池 そうなんです。こういうことをしてみたくなったのは、私が女高師のころ、「ダルトン・プラン」っていうのが言われておりましたね。「自由と、それから、みんな一緒になって何か仕事をする」「共働」というのが基本の考えになっておりましたね。それまでの、一斉に教え込む形の教育に対して、当時としては非常に新しい考えだったわけでした、そういう考えのもとに「目的的活動」っていうのをやって、それにたいへん共鳴しておりましたから、そういう生活をさせれば子供たちが喜ぶだろうと思ひまして……。そのころ、倉橋先生が、何でもやっていいっておっしゃいましたね、教師になるとすぐそんなことを始めたんです。そして、それを倉橋先生が見

ていらして、「誘導保育」という名をおつけになって、そういう理論をお立てになつた。

中島 そうすると、「誘導保育」を実際におやりになり始めたのは、菊池先生でしたわけですね。

菊池 いちばん初めだと思つて、倉橋先生がたいそう喜んで下さつて、「誘導保育」という倉橋先生の御本もある

くらいでございます。最初にね、誘導保育の「ごく小さいんですけど、「動物園」なんかやつたんです。「サウンド・ボックス」っていうのがありましてね、倉橋先生が外国で見つてらして、これを一部屋に一つずつ置いたんです。砂をいっぱい入れまして、雨の日でも教室の中で砂遊びをしたものです。

中島 お茶の水から大塚へ引越しましたいへんだつたでしょう。

菊池 でもね、事務の方などが大分やつて下さいましたから、たいへんだつたという記憶はございません。引越す時に、いろいろ大事な荷物があるので、そのころ「誘導保育」で作つた、子供の入るような

「おうち」——お茶の水のブラック園舎のちようどうしるに材木屋さんがありましたから、そこから仕入れた材木で、子供と一緒に作つた「おうち」なんですけど、「こんなもの持つていけない。」つて言つたんです。そうしたら倉橋先生が、とんでもない、それこそいちばん大事なものだ。」つておっしゃいましてね、この「おうち」を選んだ覚えがあるんです。それでね、大塚の、ちようど職員室の向かいの「山の組」へ持つていきました。

中島 そうすると、先生の組でお使いになつた。

菊池 そうですね。今、クラス会なんかをすると、私のクラスのその「おうち」

が、とても羨ましかつたつておっしゃいますね。ふだんは私のクラスだけで使つていましたから。「一日、先生に貸してもらつたこと、ありますね。」なんておっしゃるんですよ。私は忘れていきますけどね。

中島 その「おうち」は、扉が開くようになってる。

菊池 ええ。でも素人細工ですから、ひん曲がつてゐるんです。

中島 子供つていうのは、よく押入れの中に入りまじたり、こういう中に入るのが……。

菊池 そう、好きなんです。自分が入れる「うち」ね。当時は、こういうふう

に、わりと大胆に大きいことをやつていたんですよ。津守先生などは、「今の幼稚園には、それがいい。」つておっしゃいます。あんまりきれいで。戦争後も、例えば、園庭の一角に「飛行機」をこしらえて、みんなのでつたりしたんです。薄い板ですけ

ど、そういうものを使って「飛行機」を作り、子供たちがのって遊んだ。

中島 自分がのれる「飛行機」素晴らしいですね。操縦して空を飛んでる気分を味わったでしょうね。こんなに大きいものを作ったんだっていう自信もわくし。でも、ぬいぐるみのお人形なんかは先生方がお作りになったんでしょ。

菊池 いいえ、子供と一緒に致しました。「じゅうたん」なんかもね、子供と一緒に作りました。私がお米屋さんの麻袋を買ってきて、水をうってごみを流して、それから男の子でも毛糸針を使って完成しましたよ。

中島 そういえば、及川先生も腰掛けてぼくらと同じようなことをなさっていたように思います。その時のことを思い起こしてみても、先生に手伝ってもらったっていう記憶はないんです。子供ができるようなもので、それぞれに作らせていたんでしょ。

うか。

菊池 そうです。子供にできないことはありません。でも、時にはお子さんによっては難しいもので手伝ってあげることもありますけど。お子さんは、手伝ってもらったという印象はないようです。

中島 そのへんは、先生方の御指導の何とも言えない何か、によるんでしょうけど。

菊池 救いだと思っただけでね、それが。「先生に手伝ってもらった。」なんて言う人はいないんです。みんな「できたよ。」って喜んで見せて歩いています。

中島 そうです。教え込まれたっていう印象は、全くない。

菊池 そうおっしゃいます。みなさん、そのころの方は。

中島 それが不思議なんだな。

\*

菊池先生のお話は、まだまだ続いた。そして、その不思議さが何によるものであるかは、お話の言葉からはつかめなかった。

しかし、七十九歳の先生が、私の面影をたよりに西荻窪の駅の改札口で三十分以上も待っていて下さったという、この日の先生の私へのお心づかいを考えてみても、当時の私どもへの御配慮が、並々ならぬものであったことを感じた。終って、先生のお宅の前で、先生のお姿を写真に撮らせて頂くことができた。先生が、いつまでもお健やかで、この日のようなお話を、また聞かせて頂くことを願いつつ、先生の温かい視線を背に受けながら帰途についた。 〓了〓

◆聞き手の中島国太郎氏は、附属幼稚園卒園生。現在は、東京都立教育研究所で幼児教育部門の指導にあたっています。